



**【創造魔法】を覚えて、
万能で最強になりました。4
クラスから追放した奴らは、
そこらへんの草でも食ってる!**

ALPHAPOLIS

久乃川あずき

Kunokawa Azuki

アルファライト文庫 

Main Characters

主な登場人物

神代霧人

七池高校二年A組の一人で、成績優秀、スポーツ万能な完璧超人。エリナとともに魔族に与して新たな七魔将となった。

姫川エリナ

七池高校二年A組の一人。魔族に与してネクロマンサーとしての力を手に入れ、新たな七魔将となった。

比留川四郎

七池高校二年A組の一人。卑怯な性格が災いして追放されたが、謎の力を得て舞い戻る。

ミルル

「銀狼の団」のリーダーを務めるSランク冒険者。語尾に「にゃ」をつけて喋るのに、狼の獣人と人間のミックス。

高崎由那

七池高校二年A組の一人。儂樹の幼馴染で、クラスで二を争う美人。魔族に捕らえられ、魔物の力を与えられた。

クロ

猫の獣人で、「神速の暗黒戦士」の異名をとるSランクの冒険者。

水沢優樹

異世界に転移した七池高校二年A組の一人。怪我を理由にクラスから追放されるが、偶然「創造魔法」を手に入れたことで運命が大きく変わっていく。

七池高校 二年A組の生徒たち

氏名(五十音順)	出席番号
秋原拓也 (あきはらたくや)	1
浅田瑞恵 (あさだみずえ)	2
甘枝胡桃 (あまえだくるみ)	4
笠松小次郎 (かさまつこじろう)	8
神代霧人 (かみしろきりと)	9
北野宗一 (きたのそういち)	11
死 久我山恵一 (くがやまけいいち)	14
死 黒崎大我 (くろさきたいが)	16
郷田力也 (ごうだりきや)	18
古賀恭一郎 (こがきょういちろう)	19
高崎由那 (たかさきゆな)	23
長島浩二 (ながしまこうじ)	25
死 羽岡百合香 (はねおかゆかりか)	27
原口奈留美 (はらぐちなるみ)	28
姫川エリナ (ひめかわえりな)	29
比留川四郎 (ひるかわしろう)	30
松岡亜紀 (まつおかあき)	32
水沢優樹 (みずさわゆうき)	33
南千春 (みなみちはる)	34
宮部雪音 (みやべゆきね)	35
(他十五名は死亡)	

プロローグ

僕——水沢優樹は七池高校二年A組の三十四人のクラスメイトとともに異世界に転移した。

それから三ヶ月で十五人のクラスメイトが死に、ケガをした僕はクラスから追放されてしまった。

普通なら、森の中をうろつき回るモンスターに殺されていたらう。

しかし、僕は『創造魔法』を覚えたことで生き延びることができた。

創造魔法は万能の魔法で、素材さえあれば何だってできる。

強力な呪文でモンスターを倒すこともできるし、美味しい料理を具現化することも可能だ。

僕は冒険者となり、幼馴染みの由那、猫の獣人のクロとパーティーを組んだ。

そして、創造魔法を教えてくれた英雄アコロンとの約束を果たすために、僕たちは動き出した。

それは、魔王ゾルデスを倒すことだ。

sozomaho wo oboete banno de
saikyo ni narimashita.

アクア国の王様に会って、ゾルデス討伐の協力を得た。
さらに新たな仲間として、獣人ミックスのミルルが加わった。
僕たちは七魔将カリィネを倒して、ゾルデスがいる最果ての大迷宮に向かうことになった。

第一章 つかの間の休日

僕と由那は、深い森の中にある家で昼食を取っていた。

リビングの中央に置かれたテーブルの上では、創造魔法で具現化した『ピザール』のピザが湯気を立てている。

「んーっ、幸せ」

ピザを口にした由那が満足げな笑みを浮かべた。つやのある黒髪に色白の肌、ぱっちりとした目の下にはほくろがある。スタイルも良く、冒険者用の服の胸元が大きく膨らんでいた。

「ピザールの照り焼きチキンピザは美味しいね」

由那はメガネの奥の目を細くする。

「そうだね。イタリア人からは怒られそうだけど、ピザの具に照り焼きチキンはすごく合ってると思うよ」

僕は切り分けられたピザを手に取り、一口食べる。

溶けたチーズと照り焼きチキンの組み合わせは最高だな。コーンとマッシュルームも

入っているし、刻み海苔が香ばしさをプラスしている。

この世界で食べた料理にも美味しいものはあったけど、やはり、元の世界の料理にはか
なわない。特に日本では、世界中の美味しい料理を食べることができたし。

僕は右手の人差し指にはめた『ダールの指輪』を見つめる。

この指輪の中には多くの素材が収納してある。この素材さえあれば、創造魔法は万能だ。
美味しい料理を出すこともできるし、強い武器や防具を作ることでもできる。千人以上の
軍隊を一発で殲滅させる高位呪文も使えるんだ。

「ねえ、優樹くん」

由那が僕に声をかけた。

「この後、何をするの？」

「今日は体を休めておこうか。明日から忙しくなるし」

「明日はヨタトの町に戻って、みんなと合流するんだよね？」

「うん。いっしょにカラロ城に行く予定だからね」

僕は壁に貼ってあるアクア国の地図に視線を向ける。

カラロ城を攻めるのは、『幻惑の軍師』シヤムサスが率いる十万の軍隊だ。十日で城を
落とす計画を立ててみるみたいだけど、上手くいくんだろうか。

当然、カラロ城を守る魔族側もアクア国の軍隊が攻めてくることを知ってるだろうし。

厳しい戦いになるかもしれない。

その時、誰かがドンドンと玄関の扉を叩いた。

「ん？ 誰だろう？」

立ち上がって扉に近づくと、声が聞こえてきた。

「優樹くん！ いるんでしょ？」

「この声は……」

僕は金属製の扉を開けた。

そこにいたのは副委員長の瑞恵だった。

瑞恵は英語の文字が印刷されたTシャツとチェック柄のスカートを穿いていて、髪は短
く切っている。学校から走ってきたのか、Tシャツの胸元が汗で濡れていた。

「優樹くんっ！ 助けて！」

瑞恵が僕の上着を掴んだ。

「助けてって、何かあったの？」

「学校に大きなクモが襲ってきてるの」

「クモって、八本脚のクモ？」

「そうよ！でも、犬ぐらい大きくて何百匹もいるの。それで……委員長がケガして」
瑞恵の目が赤くなっている。

「お願い！宗一くん……委員長を助けて！あの石をあげるから！」

「あの石？」

「そう。黒くてキラキラした石よ。三日前に私が見つけたの」

「『魔石』か……」

あの石は新しい魔法を創造する時に必要になる素材だ。今の僕は百個以上持っている。今さら、欲しい素材じゃない。

だけど……。

「わかった！由那もついてきて！」

僕たちは家を出て、二百メートル先の学校に向かった。

校門から学校の敷地に入ると、ヤンキーグループのリーダー、恭一郎と剣道部の小次郎が赤黒いクモに囲まれていた。

クモは中型犬ぐらいの大きさで、八本の脚の先端は鋭く尖っていた。八つの目は赤く、白い牙からは半透明の液体が垂れている。

僕は腰に提げていた『魔銃零式』を取り、ダールの指輪から『通常弾』を装填する。二匹のクモが恭一郎に飛びかかった。同時に僕は引き金を引く。

銃声が響き、二匹のクモの丸い体に小さな穴が開いた。その穴から黄色い体液が噴き出す。

「ゆ、優樹……」

ぼかんとした顔で恭一郎が僕を見つめる。

「ケガはない？」

「……あ、ああ。俺たちは」

その時――。

「キユキユッ！」

校舎の壁に張りついていた数匹のクモが甲高い鳴き声をあげて、飛び降りてきた。

「優樹くん、私にまかせて！」

由那が巨大化した斧を両手で振り回す。

クモの体が切断され、赤黒い手脚が地面に落ちた。

強いモンスターじゃないな。でも、数も多いし、みんなにはきついか。

「ひつ、ひいいつ！」

突然、校舎の昇降口から、料理研究会の胡桃が飛び出してきた。その背中にはクモが張りついている。

「たっ、助けて！」

胡桃の足がもつれて、前のめりに地面に倒れた。

僕は胡桃に駆け寄り、背中に張りついていたクモを蹴り上げる。

胡桃から離れたクモに銃口を向けて、僕は通常弾を撃った。

クモの頭部に穴が開き、カシヤカシヤと動いていた脚が停止する。

「優樹くん！ あっちょよ！」

僕の後ろにいた瑞恵が体育館を指さした。

視線を動かすと、体育館の前に七人の元クラスメイトたちがいた。その周囲を数十匹のクモが取り囲んでいる。野球部の浩二とヤンキーグループの巨漢、力也が必死に鉄の棒を振り回しているのが見えた。

僕は走りながら、みんなを取り囲んでいるクモの位置を確認する。

よし！ この距離なら……。

ダールの指輪に収納していた『魔力キノコ』『赤炎石』『星水晶』を組み合わせて、『ファ

イヤーボール改』の呪文を使用した。

具現化された数十の火の玉が、意思を持っているかのように動きクモに当たる。

「キュイイツ！」

クモたちは炎に包まれて動かなくなった。

「優樹！ 助けにきてくれたのか」

浩二が僕に駆け寄ってきた。

「やっぱり、お前は俺たちのヒーローだぜ！」

「副委員長が魔石……黒い石をくれるって言ったからだよ」

僕は腹部を押さえて倒れている委員長の宗一に近づいた。宗一のシャツは破れていて、ズボンまで血で濡れている。

傷は深そうだな。このまま血が止まらないなら、出血多量で死ぬだろう。

「僕は……死ぬんだな……」

宗一は青白い唇を動かした。

「むなしい……人生だった。こんな世界に……転移して……草ばかり食って。元の世界にいたのなら、有名な大学に入って、一流企業に就職できたのに……」

「まだ、死ぬって決まったわけじゃないよ」

僕は魔力キノコと『夢月草』を組み合わせて、回復魔法を使用した。黄金色の光が宗一の腹部を照らした。みるみる傷が塞がっていく。

「……………これは？」

宗一は驚いた顔で腹部を触る。

「僕は……助かったのか？」

「うん。回復魔法を使ったから」

「回復魔法？」

「ケガを治す魔法だよ。ある程度の傷なら、この魔法で治すことができるよ」

「そつ、そんなことができるなんて、聞いてないぞ」

「言つてなかったからね」

僕は周囲を確認する。

近くにいたクモは由那が倒していて、残っていたクモも学校の敷地から逃げ出している。もう大丈夫みたいだな。一匹一匹なら、みんなでも倒せるだろうし。

「ちよつと、優樹くん！」

自己中心的な奈留美が僕に声をかけてきた。

「私もケガしてるの。早く治してよ」

そう言つて、奈留美はクモに引つかかれた腕の傷を見せる。

「すぐくヒリヒリして痛いんだから」

「その傷、たいしたことないよ。もう血も止まってるみたいだし」

「はあ？ 委員長は治したでしょ。それなのに私を治さないって、おかしいからー」

奈留美は眉を吊り上げた。

「これって、差別よね」

「違うよ。委員長は回復魔法を使わなかったら、死ぬ可能性が高かった。でも、君は元氣じゃないか」

「元氣じゃないから！ それに傷痕が残ったらどうするの？ 責任取つてくれるわけ？」

「どうして、僕が責任取らないといけないんだよ」

ずっしりと肩が重くなる。

毎度のことだけど、奈留美と話していると頭が痛くなるな。ここまで自分勝手な人間は見ることがない。

「とにかく、僕の仕事は終わったよ。約束通り、魔石をもらうから」

「わかつてる。ちゃんと約束は守るから」

瑞恵がスカートのポケットから魔石を取り出し、それを僕に渡してくる。

「……うん。小さいけど、魔石だね」

僕は魔石をダールの指輪に収納した。

「じゃあ、僕は家に帰るから」

「おいっ、待てよ！」

浩二が背後から僕の肩を掴んだ。

「その石を渡したんだから、ついでに食い物も出してくれないか」

「食い物？」

「ああ。そのぐらいいいだろ？」

浩二は壊れた小屋を指さした。

「俺たちが育ててた鳥をクモが殺したんだ。このままじゃ、自分、野草サラダとスープだけの生活になるからさ。胃ががつんとくるものが食いたいんだよ」

「狩りはやってないの？」

「最近は上手いかななくてさ。新しいゴブリンの群れが狩り場の近くに巣を作ったし、恵」と雪音もいなくなったからさ」

「ああ、今は十一人か」

僕は元クラスメイトたちを見回す。

異世界に転移した時は、三十五人のクラスメイトがいたのにな。

「だから、『ビッグマグド』ぐらいいいだろ？」

浩二が僕の肩に太い手を回した。

「もう、お前に逆らうつもりなんてないんだからさ」

「無理だね。食べ物を出すための素材も貴重だし、それは仲間のために取っておきたいから」

「仲間？ そいつらにはビッグマグドを食わせてるのか？」

「ビッグマグドはまだ食べさせてないけど、『杉阪牛』のステーキやシュークリームは食べさせたかな。どれも好評だったよ」

「杉阪牛のステーキだっ！」

力也が野太い声を出した。

「おっ、お前、そんなものも出せたのか？」

「うん。僕が食べたものなら、何でも魔法で出せるから」

「何でもって……カツ丼や天丼もか？」

「もちろん。他にもピザとか寿司とかラーメンとか……」

「あああっ！」

胡桃が僕の前で土下座した。

「お願い、優樹くん。とんこつラーメンを……とんこつラーメンを出して！ 私、ラーメンが大好きなの」

「バカっ！ とんこつラーメンより、杉阪牛のステーキだろうがっ！」

恭一郎が怒声をあげた。

「肉だぞ、肉！ しかも最高品質の牛の肉だ！」

「でも、ラーメンだって、チャーシューが載ってるし」

「値段を考えろ！ 杉阪牛のステーキは三万円を超えるのもあるんだぞ！」

「待てっ！」

小次郎が口を開く。

「日本人なら、寿司にするべきだろう。この世界の魚を生で食うのは無理そうだしな。寄生虫の問題があるだろうし」

「いや。杉阪牛のステーキだ！」

「とんこつラーメンよ！」

胡桃と恭一郎と小次郎が言い争いを始めた。

食べ物を出すなんて、言っていないのに……。

僕は頭をかきながら、ため息をつく。

その時――。

コンクリートの堀の向こう側から、大きな音が聞こえた。

全員の視線が音がした方向に向く。

そこには、背丈が五メートルを超える巨大なクモがいた。クモは全身が黒光りしていて、八つの目が赤く輝いている。

「ギイイイ！」

クモは八本の脚を動かして、こっちに近づいてくる。

「ひ、ひいひいっ！」

千春が悲鳴をあげて、後ずさりする。

他のクラスメイトたちも恐怖に顔を歪めて、僕の背後に回った。

クモの親玉か。あれは通常弾では倒せそうにないな。

僕は『エクスペローダー弾』を魔銃零式に装填し、近づいてくるクモに向けて引き金を引いた。

銃声が響き、弾丸がクモの額に当たる。金属同士がぶつかったような音がして、エクスペローダー弾が弾かれた。

小さなクモと違って硬いな。それなら、脚の関節を狙って動けなくするか。

「由那っ！ 僕がクモの動きを止めるから」

「わかった」

由那の持っている斧がさらに大きくなった。

「どいてろ！ 優樹」

突然、聞き覚えのある声が背後から聞こえ、誰かが僕と由那の間をすり抜けた。

声の主は追放された四郎だった。

四郎の頬は瘦けていて、手足は棒のように細い。冒険者風の服を着て、茶色のブーツを履いていた。

「さて、と」

四郎は口角を吊り上げて、巨大なクモに突っ込んだ。

「ギイイイ！」

クモは突った前脚を振り下ろす。

その攻撃をかわして、四郎はジャンプした。前脚の関節部分に飛び乗り、さらにジャンプしてクモの真上に移動する。

「一瞬で終わらせてやるよ」

四郎は笑いながら、右手を振り上げた。

「ギッ……ギギッ！」

クモは楕円形の胴体を上下に揺らして、四郎を振り落とそうとする。

「もう遅い！」

四郎の右手のひらが縦に裂け、その部分から胴回りが二十センチ近くある細長い生き物が姿を見せた。色は赤黒く、先端の部分の口には突った歯が円形状に並んでいる。

その生物の胴体が長く伸び、頭部がクモの赤い目を突き破った。

グシユ……グシユ……グシユ……。

肉が喰い千切られるような音が聞こえてくる。

「ギ……ギギ……」

クモの動きが止まり、ぐらりと体が傾く。

そして、クモは地響きを立てて横倒しになった。

同時に四郎がクモの上から飛び降りる。

「残念だったな、優樹」

四郎はだらりと舌を出した。

「みんなの前でかいクモを倒して、ヒーローになりたかったんだらうけど、それは僕の

役目になったみたいだね」

「ヒーローになる気なんてないよ」

僕は四郎と視線を合わせる。

「僕は報酬をもらって、クモ退治をしてただけだから」

「報酬がなければ、みんなを助けなかったってことか」

「そうだね。ビジネススライクにつき合おうって、委員長にも言われてたし」

「……ふーん。やっぱり君は冷たい男だね」

四郎は右手を胸元まで上げた。手のひらから出ている細長い生物が尖った歯をカチカチと鳴らして、僕を威嚇する。

「まあいいや。せっかく会えたことだし、ここで君との決着をつけることにしようか」

「君と戦う気はないって言っただろ？」

「それなら由那は僕がもらうぞ。お前程度の能力じゃ、由那を守れないからな」

四郎の視線が僕の隣にいる由那に向いた。

「由那っ！ 君もそろそろ気づきなよ」

「気づくって何に？」

由那が低い声で言った。

「優樹より、僕のほうが強いってことにだよ」

「仮にそうだったとしても、私は優樹くんとまの側そばにいるから」

「安心しなよ。食べ物なら、優樹を奴隷どれいにして、いくらでも出させるから」

「食べ物に関係ないよ。私は優樹くんが好きだから、いっしょにいたいんだよ」

その言葉に四郎の瘦けた頬がびくりと動いた。

「……ああ、君と優樹は幼馴染みだったな。それなら、好意を持つことぐらいあるか。でも、それは真実の愛じゃない」

「真実の愛？」

「そうさ。君が愛するべき者は最強の力を手に入れた僕だ。僕こそが君の恋人……いや、夫にふさわしい男なんだよ」

血走った目で四郎は由那を見つめる。

「今から、それを証明してやる。優樹を叩きのめしてね。ひひっ！」

またか……。

僕はため息をついた。

これだけ僕に執着するのは、四郎が由那を好きだからか。

四郎の気持ちはわかる。元の世界にいた頃から、由那は綺麗で可愛かったし、今の由那

はサキュバスの血が混じっているせいで、さらに魅力的みりくつきになった。

そんな由那を手に入れたいと多くの男が思うだろう。

当然、由那の側にいる僕は妬ねたまれるってことか。

「優樹っ！ 君は運がいいよ！」

四郎が言った。

「元の世界の食べ物を出せる能力があるから、僕に殺されることはない。まあ、実力の違いを証明するために手足ぐらいいは折らせてもらおうけど」

「ねえ、四郎」

ヤンキーグループの亜紀あきが口を開いた。

「優樹を奴隷にするのなら、私たちにもビッグマグドを食べさせてよ」

「ああ、いいよ。君たちが僕に忠誠ちゅうせいを誓ちかうのならね」

「もちろん、誓うわ」

亜紀は上唇かみを舐めた。

「この世界じゃ強い者が正義なんだし」

「わかってるじゃないか」

四郎の口角が吊り上がる。

「で、他のみんなはどうする？」

「僕も四郎さんに忠誠を誓うよ」

アニメ好きの拓也たくやが右手を挙げた。

「『かつつ家』のカツ井かついが食べられるのなら、リーダーが誰だっもいいよ」

「待てよ」

恭一郎が四郎に近づいた。

「お前、優樹に勝てるのか？ 前に優樹の銃でやられてたじゃねえか」

「あの時の僕とは違うよ」

四郎の手のひらから伸びている細長い生物が、カチカチと尖った歯を鳴らした。

「今の僕はドラゴンだっけ殺せるからね。それにみんなも見ただろ？ 優樹の銃が効きかなかったクモを僕はあつという間に殺したんだ」

「なら、さっさと優樹くんを奴隷にしてよ！」

「なら、さっさと優樹くんを奴隷にしてよ！」

奈留美が叫んだ。

「そしたら、あなたを王様って認めるから」

「ふん。相変あいかわらず、自分勝手な女だな」

四郎は短く舌打ちをした。

「まあいい。今は優樹だ。さあ、やるぞ！」
 「やらないって言ってもダメなんだろうね」
 僕は数歩下がって、魔銃零式を構える。

「由那は下がって。大丈夫だから」
 「大丈夫ねえ」

四郎は頭を右に傾けて、僕を見つめる。
 「その余裕がいつまで続くか、楽しみだよ——『漆黒蟲』、出てこい」

四郎の左手のひらが縦に裂け、そこから直径一センチぐらいの黒い蟲が這い出してきた。無数の漆黒蟲は四郎の腕、肩、胴体を包むように移動する。

そして、四郎の全身が漆黒蟲で覆われた。
 これは……蟲の鎧か。

「さて……と」

四郎は腰を軽く曲げて、僕に近づく。

僕は魔銃零式の引き金を引いた。

通常弾が四郎の肩に当たり、弾け飛ぶ。

「残念だったな、優樹」

四郎がにやりと笑った。

「この鎧はドラゴンの爪だって防げたんだ。銃の弾程度じゃ、小石を投げられたようなものさ」

「……なるほど」

僕は四郎に銃口を向けたまま、ふつと息を吐く。

エクスペローダー弾を使えば、なんとかなるかもしれないけど、四郎が死ぬかもしれない。

四郎は卑屈で残忍な性格をしている。特別な能力を手に入れてからは、傲慢な態度も取るようになった。仲良くなりたくないような人物じゃない。

だけど、四郎を殺したいとは思わない。

「鎧だけと思うなよ」

四郎の右手から伸びていた細長い生物の頭部がポコポコと膨らみ始めた。

それは膨張を繰り返して、人の形に変化した。

背丈は二メートル、頭部には目と鼻がなく円形状の口に尖った歯が均等に並んでいた。

肩幅は広く、だらりと下げた両手は地面につくほど長い。細長いしっぽの部分が四郎の手のひらと繋がっていた。

「カカカッ！」

尖った歯を鳴らして、それは笑った。

「『蛇王蟲』だよ」

四郎がその名前を言った。

「こいつを育てるのに時間がかかったよ。でも、苦勞したかいはあったな。こいつの戦闘力はドラゴンと同レベルだからな」

蛇王蟲が上半身を揺らしながら、僕に近づいてくる。

「蛇王蟲！ 優樹の手足を折ってしまえ！」

四郎の言葉を理解しているのか、蛇王蟲が僕に突っ込んできた。

僕はダールの指輪に収納していた魔力キノコ、『一角狼の角』『光妖精の髪の毛』『時蟲の粉』を組み合わせて、身体強化の呪文——『戦天使の祝福』を使用する。

一瞬、僕の体が青白く輝き、パワーとスピード、防御力が強化された。

「カカッ！」

蛇王蟲が長く太い腕を真っ直ぐに伸ばした。僕の顔面に巨大なこぶしが迫る。

僕は左足で地面を蹴って、一気に右に移動した。そのまま、蛇王蟲の脇腹に通常弾を連続で撃ち込む。銀色の弾丸が赤黒い皮膚の表面で止まった。

硬いな。それなら……。

僕は蛇王蟲と距離を取り、エクスポローダー弾を撃った。

大きな銃声が響き、蛇王蟲の肩が爆発する。

しかし、大きくえぐられた肩の部分は数秒で再生した。

「残念だったね。きひっ」

蛇王蟲の背後にいた四郎が笑い声をあげた。

「蛇王蟲は不死身なのさ。どんなにダメージを与えても再生するからね」

「再生能力つきのモンスターか」

僕は後ずさりしながら、銃口を蛇王蟲に向けた。

前に戦った魔族のギルドールと同じ能力だな。切り札の一つの『滅呪弾』を使えば、多分倒せるだろうけど、あれは温存しておきたい。

他の手でなんとかするか。

僕は新たな弾丸を魔銃零式に装填して、引き金を引いた。

『ガム弾』が蛇王蟲の足に当たり、一気に膨れ上がった。

蛇王蟲の動きが止まる。

よし！ これで四郎に集中できる。

そう思った瞬間、蛇王蟲の足が細長く変化した。固まったガム弾が足から外れる。

「カカカッ！」

蛇王蟲はコンパスのような細い足を動かし、僕に駆け寄る。

伸縮自在の体つてことか。それなら……。

僕は、魔力キノコ、『雪蟲の粉』『水竜の血』を組み合わせて、『氷結嵐』の呪文を使用する。

目の前に迫った蛇王蟲の下半身が凍りつき、横倒しになる。

その下半身に向かって、僕はエクスポローダー弾を撃った。ガラスが割れるような音が出て、蛇王蟲の下半身が砕ける。

「ガ……ガガ……」

それでも蛇王蟲は生きていた。ボコボコと赤黒い肉を泡のように膨らませ、下半身を再生させようとしている。

そうはさせない。

僕はエクスポローダー弾を連続で撃った。赤黒い体に弾丸が入り込み、次々と爆発する。周囲の地面がえぐれ、小さな肉片が飛び散った。

「ガ……ガ……」

蛇王蟲の声が途切れ、上半身の動きが止まった。

これだけバラバラにすれば再生は無理みたいだな。

動かなくなった肉片を見て、僕は息を吐く。

「ウソ……だろ？」

四郎が掠れた声を出した。

「拳銃の弾ごときで蛇王蟲がやられるのか」

「特別製の弾を使ったからね」

「特別製の弾？」

「エクスポローダー弾だよ。弾頭に素材を入れて、着弾と同時に爆発させるんだ。その弾を連続で撃ち込んだから、再生が間に合わなかったんだよ」

僕は銃口を四郎に向ける。

「もういいだろ？ これ以上戦う意味なんてないよ」

「……意味がないだと？」

「うん。君はこの異世界で特別な力を手に入れた。その力があれば、西の町にも行けるし、そこで冒険者として生きることできる。僕なんかにこだわる必要はないんだよ」

「いや、あるね。お前のせいで僕は追放されたんだから」

「僕が君を追放したわけじゃないし」

僕は左手で頭をかく。

「君を追放したのは委員長たちだろ？」

「原因を作ったのはお前じゃないか！」

四郎がぎりぎりど歯を鳴らした。

「お前が追放されて死んでいたら、こんなことにはならなかったんだ！ お前がいなかったら、僕が由那を……」

四郎の視線が一瞬由那に向いた。

「……もういい。食い物なんてどうだっていい。やっぱり、お前を殺すことにするよ」

「……殺す？」

「そうさ。お前が死ねば全て上手くいくんだ」

四郎の目が血走り、体を包んでいる無数の漆黒蟲が金属を引っかくような音を立てる。

「これからは殺し合いだ。覚悟はいいな」

「君に人が殺せるの？」

「楽勝さ。恵一も殺したしな」

「恵一を殺した？」

「ああ。この前、森の中でね」

四郎の言葉に、周囲にいた元クラスメイトたちの顔が強張った。

「おつ、お前、本当に恵一を殺したのか？」

浩二の質問に四郎はうなずいた。

「あいつは僕の追放を提案したからな。殺されても文句はないはずだ」

「殺されてもって……」

「何だよ？ お前も文句があるのか？」

「い、いや……」

浩二は四郎から視線をそらして、口をもごもごと動かす。

「ふん。雑魚どもは黙って見てろ。僕が優樹を殺すところをな」

そう言うと、四郎は僕に突っ込んできた。

「死ねっ！ 優樹！」

四郎のこぶしが僕の顔面に迫る。僕は上半身をそらして、その攻撃を避ける。

「甘いぞー！」

四郎のこぶしが開き、そこから黄色い粉が出て宙に舞った。

その粉が僕の目に入ると同時に視界が白くなる。

「くっ……」

僕は目をこすりながら、四郎から距離を取る。

「きひっ。この鱗粉りんぷんでお前の目は見えなくなったな」

一瞬はね。

僕は魔力キノコと『銀香草ぎんこうそう』を使って、状態異常を治す呪文を使った。

目の前に僕を殴ろうなぐとしている四郎の姿が見える。

僕は四郎のパンチをかわして、新たに考えた魔法『リビングクウォーター』を使用する。

数百リットルの水が具現化し、意思を持っているかのように四郎の体を包み込む。

「ぐ……何だこれは？」

四郎は両手で胸元の水を引き剥はがそうとするが、水は指と指の間からすり抜ける。

「くそっ！ 水ぐらいで」

四郎は水に包まれたまま、僕に近づく。しかし、その動きは明らかに鈍にぶくなっていた。

水の中で動き回るようなものだからな。こっちは身体強化の呪文でスピードもアップし

てるし、白兵戦なら僕のほうが圧倒的に有利になった。

それに――。

四郎の体に張りついていた漆黒蟲が潮死うせし、ぼろぼろと剥がれ落ちていく。

「あ……」

四郎は呆然ぼうぜんとした顔で足元に落ちた漆黒蟲を見つめる。

僕は呪文を解いて、魔銃零式の銃口を四郎に向けた。

「これで君を守る鎧はなくなった。まだ続ける？」

「……ぐっ！」

四郎は唇を強く噛かんだ。

「お前……いくつ呪文を使えるんだよ？」

「そんなことより、二度と僕と由那に関わらないって誓ってもらえるかな」

「はあ？ 何でそんなこと」

「誓わないのなら、さっきの弾丸を君に撃ち込むことになるよ」

僕の声が低くなった。

「君の体には再生能力はないんだろ？」

「お前っ、本気でさっきの弾を使うつもりなのか？」

「うん。僕たちは殺し合いをしてみたいだからね」

「……う……ぐっ」

四郎のこぶしがぶるぶると震え出した。

「で、どうするの?」

「……ほ……僕は……」

「……ほう。創造魔法か」

突然、四郎の腹部からしわがれた老人のような声が聞こえた。

「お前……アコロンの弟子だな」

「……誰?」

僕の問いかけに四郎の腹部がほこりと膨らんだ。上着が裂け、へその部分に鶏の卵ぐらいの大きさの青白い顔が見えた。その顔は目が赤く、鼻と耳がなかった。

小さな顔は尖った歯が並ぶ口を動かした。

「我は蟲の王バルズ。アコロンと戦った者だ」

「アコロンと戦った?」

「そうだ。アコロンは四人の仲間とともに我の城に攻め込んできた。そして我は敗れた」

バルズの小さな唇が歪んだ。

「アコロンも魔王ゾルデスに敗れ、復讐の機会はなくなっただと思っていたが、その弟子と戦えるのなら、まさに饒倅」

「僕はアコロンの弟子じゃないよ」

「だが、創造魔法を継承している。それで十分だ」

バルズの唇の両端が吊り上がった。

「お前を殺して、脳を喰わせてもらう。そうすれば、我も創造魔法の理を知ることができらるだろう」

「ひひっ! いいじゃないか」

四郎が気味の悪い笑い声をあげた。

「喋るだけしかできないと思っただけど、お前も戦えるんだな」

「お前が多く肉を喰ってくれたからな」

バルズの赤い目が頭上にある四郎の顔に向けられた。

「もう、お前の役目は終わった」

「……んっ? 終わった?」

「そうだ。感謝するぞ。四郎」

バルズがそう言うのと、四郎の腹部がさらに大きくなった。

「なっ……何だ?」

四郎はバランスを崩して、尻もちをついた。

その間にも腹部はどんどん大きくなっていく。

「あ……ああ……」

上着が破け、腹部は四郎の体を押し潰すように膨らんでいく。

「た、助け……があつ！」

風船が割れるような音が出て、四郎の体が爆発した。周囲に赤い血と肉片が飛び散る。そして、バルズが姿を現した。

バルズは背丈が三メートル近くあり、上半身は人の形、下半身はカマキリのような形をしていた。

六本の脚は濃い茶色で、びっしりと薄い毛が生えている。

バルズの異様な姿にクラスメイトたちから悲鳴が漏れた。

僕は魔銃零式を構えたまま、ゆつくりと後ずさりする。

「逃げる場所などないぞ」

バルズが巨体を揺らして僕に歩み寄る。

「森には我が配下である蟲たちがいる。数百万匹の蟲たちがな」

「……でも、君を殺せば問題ないだろう？」

「殺せば、な」

バルズはにやりと笑った。

「お前の力は見切っている。詠唱なしの魔法と金属を飛ばす武器は見事なものだ。だが、それでは我が体にダメージを与えることは不可能だ」

「不可能……か」

「所詮、お前はアコロンのがまがい物だからな。奴とは違う」

バルズは鎌のような前脚を上下に動かす。

「くくくつ！ 久しぶりの戦いだ。すぐには死ぬなよ」

バルズは右の前脚を斜めに振り下ろした。

僕は頭を下げて、その攻撃をかかわす。

巨体のわりに速いし、前脚の攻撃範囲は広い。注意しておかないと、あの鎌で一気に殺されてしまうぞ。

バルズと距離を取りながら、魔銃零式の引き金を引く。

同時にバルズの前に半透明の壁が現れた。その壁がエクスプローダー弾を弾いた。

魔法も無詠唱で使えるのか。王を名乗るだけはあるな。

僕は「黄金蜘蛛の糸」「重魔銃の粉」「闇蟲の乾燥卵」、魔力キノコを組み合わせて、「マジックネット」の魔法を発動させる。

無数の白い糸がバルズに降りかかった。

「この程度の糸で我を縛れるものかつ！」

バルズは糸に絡まりながらも、僕に向かつて突っ込んでくる。僕は真横に跳んでバルズの突進を避けた。

あまりスピードは落ちないか。

僕はバルズの背後に回りながら、エクスポローダー弾を撃った。弾丸がバルズの後脚に当たり、爆発する。

「それがどうしたっ！」

バルズの下半身から十本以上の黒い触手が飛び出してきた。触手は先端が尖っていて、一本一本が個別の意思を持っているかのように僕に襲い掛かってくる。

巨大なハリガネムシみたいだな。

僕は上半身を捻って、触手の攻撃を避ける。

その時――。

離れていた由那が動いた。一気にバルズに駆け寄り、巨大化した斧を振り上げる。

「ちっ！ 加勢か」

バルズは十本の触手で由那を攻撃した。由那は高くジャンプして、空中で体を捻りながら斧を振る。三本の触手が千切れ、黄色い体液が飛び散った。

よし！ バルズの注意は由那に向いている。

僕は魔銃零式に『毒弾』を装填して、連続で引き金を引く。二発の毒弾がバルズの下半身に当たった。

これでバルズの体に毒が回るはずだ。

「……んっ、毒の武器か」

バルズは小刻みに下半身を震わせる。

すると、弾痕から黒い液体が噴き出してきた。

毒弾の毒を体から出したのか？

黒い触手で由那を牽制しながら、バルズはにやりと笑った。

「我に毒は効かぬ。残念だったな」

「それなら、別の手を使うだけだよ」

僕は『氷結嵐』の魔法を使用する。

周囲の空気が一瞬で冷え、バルズの下半身の一部と後脚が凍りついた。

「今度は水属性の魔法か。さすがだな」

バルズが素早く呪文を唱える。

バルズの下半身の氷が一瞬で溶けた。

「くくくっ！ 我は六属性全ての魔法に対応できるのだ。アコロンのがい物のお前では我には勝てぬ」

勝ち誇った顔で笑いながら、バルズは僕に近づいてくる。

「さて、そろそろ死んでもらうぞ」

由那が僕を守るように前に立った。

「優樹くんは私が守る！」

そう言つて、由那は巨大な斧を構える。

「……ほう。勇敢な女だな。だが……」

七本の触手が同時に由那を攻撃した。

その触手を斧で弾きながら、由那は攻撃のチャンスを狙う。

その時、バルズの下半身から、新たな触手が飛び出してきた。その攻撃に由那の対応が遅れた。

触手の先端が由那の肩に突き刺さる。

「いっ……くっ……」

由那は苦痛に顔を歪めながら斧を投げる。くるくると回転した斧がバルズの下半身にわずかな傷をつけた。



「由那っ！ 下がって！」

僕は由那に回復魔法をかけながら、エクスペローダー弾を連続で撃つ。

半透明の壁が現れ、エクスペローダー弾を弾いた。

「その攻撃は無駄だと、まだわからないのか」

バルズの口が裂けるように広がった。

「お前の創造魔法も武器も我には通じぬ。理解できたか？」

「だけん断言するのは、まだ早いと思うよ」

僕は魔銃零式の銃口をバルズに向ける。

「んんっ？ まだ、手があるというのか？」

「うん。本当は使いたくなかったけど」

「使いたくなかった？」

「レア素材をいくつも使うからね。なるべく温存したかったんだ」

「……ほう。それはむしろ面白い」

バルズの目がすつと細くなった。

「どうして、それを使う気になった？」

「君はそれなりに強い魔族だからね。効果をてん試してみるのもいいかなと思つてさ。それ

立ち読みサンプル はここまで

と……」

「それと何だ？」

「君が由那を傷つけたからだよ」

喋り終えると同時に僕はバルズに突っ込んだ。

「舐めるなっ！」

バルズは鎌のような前脚を斜めに振り下ろした。その攻撃を頭を下げたかわししながら、僕は魔銃零式の引き金に指をかける。

狙う場所は……ここだっ！

僕は由那の斧が当たったバルズの下半身に銃口を向ける。

銃声が響き、装填していた『滅呪弾』が発射された。

滅呪弾が当たると同時に、バルズの下半身に黄金色の魔法文字がびっしりと刻み込まれた。その文字がバルズの細胞を壊していく。

「なっ、何だ、これは？」

バルズは焦あせった様子で唇を動かす。

どうやら、滅呪弾の効果を消す魔法を唱なえているようだ。

しかし、黄金色の魔法文字が消えることはなかった。バルズの下半身が白く変化していく。